発刊の辞

ロシアにおいてはカフカースの諸言語が知られるようになると、これらの諸言語が印欧語とは非常に異なった構造を持つことについて種々の議論が行われてきた。その中でヴィルヘルム・フォン・フンボルトの理論に強く影響を受けたと思われる碩学アレクサンドル・アファナシエヴィチ・パチェブニャーによって思惟と言語の関係を考察の対象とした学説がひとつの伝統となったが、基本的にはこの流れの中で、多くの研究者の研究がなされてきた。これは前世紀の終わり近く 70 年代頃にクリモフの内容的類型学に関する一連の著書として世に現れ、その全容が明らかになって来た。この理論はこれまでの類型学のみならず、言語学そのものの観念を根底的に揺るがすほどのものだと思われるが、既にこの見方を全面的に取り入れたガムクレリゼによる比較言語学の見直しを始めとして、言語学研究の各分野に大きな影響を与えつつある。

日本においても、従来の形式的な類型学の流れの他に、この内容的類型学による言語研究に興味を持つ研究者が現れてきた。私たちもその末流に連なるものとして、このものの見方を研究しようとするサークルを立ち上げた。集まって未だ数年足らずのささやかな会ではあるが、そこでの議論などを含めて、御報告する機会を得たことは幸いであると思っている。これが古稀を機に上梓されるのは有り難いことだと思っているが、古稀というのは充満したエネルギーに与える小さな火花に過ぎない。

山口　巖